

# 「上にあるものを思う」

## ヤコブの手紙 1 章 17 節

キリスト教センター課長 今村 優子

皆様、こんにちは。私はキリスト教センター事務室職員の、今村優子と申します。本日、この全学礼拝にて奨励させていただく機会が与えられましたことを感謝いたします。

まだまだ先とっていましたオリンピックイヤーの 2020 年も幕が開け、早 2 週間ほどが過ぎました。皆さんは、今年をどのような年にしようかと決心されたでしょうか？

新年早々ですが、少し怖い話から始めさせていただきます。皆さんは、カナダの氷雪地帯に住むイヌイット族をご存知でしょうか。彼らは狩猟民族のため、自分たちが大切に育てた家畜を襲うオオカミを退治するために殺す必要があるのですが、そのイヌイット族のオオカミの殺し方というのが大変衝撃的なのです。まずそのための道具ですが、これがいたって簡単なものです。最初に、ナイフを動物の血が入った樽に浸して取り出し、凍らせます。そして凍らせたら、今度は水の入った樽に浸して取り出し、また凍らせます。このように血の樽と水の樽にナイフを浸しては凍らせ、浸しては凍らせを繰り返し、大きな血の混ざった氷の塊がついたナイフが出来上がります。そのナイフ1本だけでオオカミを殺すというのです。彼らはそのナイフを家の外に置いて、深夜になるのを待ちます。やがて、血の匂いに導かれるようにオオカミは姿を現します。オオカミはその血を含んだ氷の塊をなめ始め、いつしかその舌は氷によって麻痺し、知らず知らずのうちに舌をナイフで切って死んでいくというのです。

どうしてこんな殺し方をするのでしょうか。

それは、オオカミが獰猛で賢く、そして執念深いからだというのです。オオカミを殺そうとして一度取り逃がしたら最後、家畜を付け狙い、復讐のチャンスを待つのだそうです。ですからオオカミを殺す時、ミスは許されません。確実に、しかも相手に自分を知らせずに殺す必要があるというのです。

さて、このシンプルで恐ろしいオオカミの殺し方ですが、どこか悪魔が私たち人間を陥(おとし)いれる方法に似ていると思うのです。私たちは、いつしか、誘惑に負け、感覚が麻痺し、罪の中に死んでいくと聖書は教えているからです。私たち人間は、神なんかいない、科学的に証明できるものだけが真実だ、今が楽しければそれでいい、という社会の中で生きるうちに、知らず知らずのうちに感覚が麻痺し、天地万物を創った神の意志を無視し、神から遠く離れ、神を知ろうとも、神を必要ともしない生活に陥(おちい)り、やがては肉体の死、魂の死を迎えていると指摘されています。

悪魔は、毒薬と書かれたビンのラベルを、ミント入りキャンディーというラベルに張り替えると聞いたことがあります。ちょっとしたミントの刺激だと意識して舐めていくうちに、舌が麻痺し、確実に死が訪れるのです。

私たちの生活は、日々危険にさらされています。残念なことに、国が国に敵対する報復の連鎖の中にあるだけでなく、私たちの個人の生活の中でさえ、怒り、憤り、悪意、うそが溢れています。テレビを付

ければ、美容整形の特集があり、何万も何十万もかけて気軽に整形する時代です。可愛いくセクシャル、といったビジュアルを重視する社会にいます。知らず知らずのうちに社会が求める価値が、正しい人間の価値のように刷り込まれ、感覚が麻痺しています。

しかし、私たちを生まれる前から愛し、形づくり、命を与えて下さった神様の価値基準は表面的なことにはありません。新約聖書、コロサイの信徒への手紙 3 章 12 節に、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい、とあります。人間の価値は表面的なことにあるのではなく、内面にあるということです。確かに、美しい人はいますがその美しさはいつまで続くでしょうか？残念なことに必ず朽ちる日がくるのです。

わたしたちの内面を照らし、清め、豊かにする方法があります。それが、今日の奨励のタイトルにさせていただいた、「上にあるものを思う」ということです。『良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である父から来るのです。』（ヤコブの手紙 1:17)

わたしたちは、「上にあるもの」、言い換えると「光の源である父」を思い、上から来る贈り物を受け取るだけでいいのです。光の源である父とは、「イエス・キリスト」です。あなたを許し続け、愛し続けて下さるイエス・キリストを心に留めるということが大事なのです。英語では「Fix your eyes on Jesus.」と書かれています。Fix とは固定する、しっかりと取り付けるという意味です。あなたの目をイエス・キリストにしっかりと向けなさい、ということです。

カウンセラーの友人によると、人の悩みは大きく3つに分けられるそうです。お金の悩み、健康の悩み、そして相談の 80%が人間関係の悩みであるということです。私たちは生きていく上でどうしても比較の中で生きてしまいます。イギリスの公衆衛生協会は Facebook や SNS などのソーシャルメディアが若者の心に不安感、孤独感、いじめ、外見への劣等感など否定的な影響を与えていると発表しました。比較して悩み、心の健康が侵されてしまうのです。比較から逃れる方法、それこそが「上にあるものに目を向ける」ことだと思うのです。

上にあるものを思い、生きた抜いた方は沢山おられます。

昨年、92歳で亡くなられた緒方貞子さんは、日本人初の国連難民高等弁務官として、世界の紛争地に赴き、難民支援に取り組み続けた方です。苦しむ人々に目を向け、手を差し伸べ続けた緒方さんもイエス・キリストの愛にふれ、生涯、その神の御心を実行されたのです。

また、先月アフガニスタンの地で尊い命を奪われた中村哲先生もそのお一人です。クリスチャンである中村哲先生は自分と人を比較せず、ただ神様を見上げ、神様の御心を行うことに専念し通した方です。先生が書かれた著書「天、共に在り」のタイトルにも先生の信仰が表れています。マタイによる福音書 1 章 23 節「神は私たちとともにおられる」は、「聖書の語る神髄である」と先生は語っておられます。

私がクリスチャンになる決心をした理由の一つは「死」でした。死に対する恐怖から、安心、平安へと変えられたのはイエス・キリストの十字架と復活の信仰です。私がどのような時にも、ともにおられる神様を信じる者には永遠の命を与えてくださるという希望があること、それは何物にも代えられない喜びです。

学生の皆さん、2020年のチャレンジとして、是非、完全で良い贈り物を与えて下さるイエス・キリストに目を注ぐことをしてみませんか？この全学礼拝で得られる沢山の聖書の言葉、そしてイエス・キリストに出会っていただきたいと心から願って、わたくしの奨励を終わります。

お祈りいたします。皆さんも、目を閉じ、黙禱の姿勢をもって祈りに心を合わせていただければ幸いです。

恵み深き天の父なる神様、今日いただいた聖書の御言葉を感謝いたします。どうか学生ひとり一人のこの1年の歩みをあなたの守りと祝福を持ってお導きください。聖学院のすべての教育とすべての活動をお支えください。神様の前に、ともにへりくだり、あなたの知恵と力をいただいて、あなたの御心を行う者としてください。

この祈りを尊き主、イエス・キリストの御名によって、御前にお捧げいたします。アーメン

2020年1月16日 聖学院大学 全学礼拝